そして戦いは終わり、勇者は花嫁になる

雪村亜輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そして戦いは終わり、勇者は花嫁になる

【Ｎコード】
Ｎ６４４６Ｔ

【作者名】
雪村亜輝

【あらすじ】
世界を滅ぼそうとしていた悪しき竜を、とうとう倒したのは異世界から召還された女子高生、美夏。やっと使命を果たしたと思ったら、今度はパーティを組んでいた仲間たちに求婚されてしまう。
彼らはみんな、信頼している大切な仲間たち。誰かひとりを選ぶことなんて出来ない。それに美夏が愛していたのは、保護者であり師でもあるひとりの魔術師だった。けれど彼は、使命を果たし終えた美夏には何故か素っ気ない。それには何か秘密がありそうで・・・。

使命を果たし終えた「勇者」は、誰の花嫁になるの？

序章（1）

光が射していた。
雲の合間から降り注ぐ、柔らかな淡い光。
それは激しかった戦いの終焉を示すかのように、美しく神々しい。
その光の中に、ひとりの少女が佇んでいた。
まだあどけなさを残しているが、不思議な雰囲気を纏っている。
それは羽化したばかりの蝶のように儚く、けれど生命の力に満ちた美しい輝き。
艶やかな長い黒髪は乱れ、不揃いになっている。無骨な武具を身につけ、細い手足には数え切れない裂傷。それでもその輝きは、決して色褪せることはなかった。
彼女の表情は慈愛に満ちていた。まるで聖母のように、すべてを慈しむように。
小柄な少女の身体をまるで包んで癒すかの如く、光は優しく降り注ぐ。
けれどその光に照らされた世界は、まだ静寂に満ちていた。
それは、ただ息を殺して怖い夜がはやく立ち去ってくれるようにと、願う幼い子どものようで。
――大丈夫だよ。
手にしていたぼろぼろの剣を手放して、少女は小さく呟く。
「もう怖い竜はいない。人を襲い、家を壊して暴れる悪い竜はいないから。だから、もう泣いてもいいんだよ。笑っても怒ってもいい。その声を聞きつけた悪しき竜に襲われるのではないかと怯える必要は、もうないんだから」
泣いている幼い子どもに言い聞かせるかのように、何度も呟く。
大丈夫。大丈夫だよ、と。

「美夏」

どのくらい、そうしていただろう。名前を呼ばれ、少女はようやく立ち上がった。
「先生」
「実夏。終わったのか」
この場にいない師の声が、静かに響く。それはこの世界に召還されたときからずっと傍にいてくれた少女の保護者であり、そして戦い方を教えてくれた師匠の声だった。その声を聞くだけで、心が落ち着いた。例え神の加護で強い力を授けられようとも、ただの高校生でしかなかった自分の心は、その強い力に反するかのように弱かった、と昔に思いを馳せた。
「先生、わたし、やりました。先生のお陰です」
感謝と、そして特別な想いを込めて、美夏は恩師にそう告げる。

あれは、ほんの一年前のこと。
一ノ瀬美夏は、高校二年の夏休みを過ごしていた普通の高校生だった。
猛暑。そんな言葉が何度もテレビで流れていたあの日。
あまりの暑さに、図書館に行って本でも読もうかと、ひとりで近くの市立図書館へと足を運んだ。
八月の始めだった。
蝉の声が聞こえてくる。
騒がしい声なのに何処かもの悲しさを感じるのは、その短い命のせいだろうか。
真夏の強い日射しを避けて、木陰を選びながら図書館への道を歩く。
来年は受験生となる。
そうすれば、もうこんなにのんびりとした気分ではいられないだろう。来年は今の三年生のように毎日のように学校へ通い、夏期講

習を受けているのだろうか。
そんなことを思い、少し憂鬱な気分のまま図書館の扉を開けた。
心地良い冷たい空気が、汗ばんだ身体をひやりと通り過ぎていく。
（やっぱり図書館は最高ね）
ほんの少しだけ立ち止まり、その冷たい空気を楽しんだ後に、美夏は空いてる席を探して図書館の中を見渡した。

序章（2）

本を読むのが、幼い頃からとても好きだった。
近所ということもあり、この図書館へも昔からよく通っていた。
一番よく訪れていたのは、やはり夏休みだろう。こんな暑い季節は大抵座る場所もないくらい混み合っているのだが、何故か今日はあれだけの猛暑にも関わらず人も少なく、がらんとして静かだった。
（……あれ？　今日に限って少ないね）
首を傾げながら、思わず人の姿を探して馴染んだ図書館の中をふらふらと歩き回る。すると子ども向けの本が並んだ辺りに。白い服を着た若い青年が居た気がした。
（よかった。誰もいないからなんだか心配になっちゃった）
学校で、駅で。もしくは混み合うはずの、商店街などで。
不意に人の気配がまったくなくなる瞬間がある。美夏はそれがとても苦手だった。
ここではない、別の世界に足を踏み入れてしまったようで。
夢見がちな子どもだったと思う。けれど文字で綴られている世界は、本当にどこかに存在している国のような気がしていたのだ。本棚の影や、教室の隅。そんなところに自分の知らない世界への入り口がきっとある。その世界に憧れながらも、同時にひどく怖がっていた。
今ではもうそんなことは考えていなかったが、それでも人のいない場所はまだ少し苦手だった。
人影につられるように、子ども向けの本が並んだ方へ足を運ぶ。
本棚がびっしりと並べられている他の場所とは違って、ここは本棚も低くて空間もゆったりとしている。真夏の強い日射しを遮断する為のカーテンが、空調でゆらゆらと揺れていた。
「あ、この本。子どもの頃に読んだなぁ。懐かしい」
何度も子どもたちの手に取られ、色褪せた本の背表紙をゆっくり

と指でなぞる。
懐かしさから手に取り、ぱらぱらとページを捲った。
妖精や、精霊たちが住まう不思議な森の話。そして、その世界を襲う邪竜。
（この竜のイラストが、とっても怖かったのよね。火を纏った紅い竜で……）
懐かしく思い出しながらそのページを開く。だが、そこに描かれていたのは記憶にある火竜の姿ではなかった。
「え？　黒い竜？」
子ども向けの可愛らしいイラストではなく、まるで実物を見て描いたかのような繊細な写実画がそこにはあった。
まるで闇に溶け込むかのように、どこもすべて漆黒だ。けれど爬虫類のような恐ろしい瞳は、不吉に輝く金色。その金色の瞳が生きているのかようにぎろりと美夏を睨んだ。
「やだ……何これ？」
思わず本を手放す。
かたん、と固い背表紙が床に落ちる音がした。

（それから……気付いたらこの世界に倒れていて）
降り注ぐ祝福の光を全身に受けながら、美夏は瞳を閉じる。

どうしてわたしが。
元の世界に戻して。
悪しき竜なんて、わたしには関係ない。
幾度、そう泣き叫んだだろう。
子どもの頃の恐怖が現実になってしまったのだから。
そんな時に彼はいつも傍にいてくれた。
戦い方を、そして強い心を教えてくれた。
今すぐ会いに行きたい。
他でもない彼に、よくやったと、自慢の弟子だと褒めて貰いたい。

その時を想像しただけで、幸福感に包まれた。
けれどそんな美夏を呼び止める、複数の声。
「美夏。……終わったな」

序章（3）

それは共に戦った仲間たちだった。
彼らの助けなしでは、悪しき竜を倒すことなど決して出来なかっただろう。出会った当初は色々とあったが、今では深く信頼している大切な仲間たち。
「やったな、とうとう」
最初に言葉を発した男は、若さに似合わぬ威厳を含ませた落ち着いた声をしている。
豪奢な長い金髪の、威風堂々とした青年だった。黒を貴重とした重厚な鎧は、見事な金の細工に彩られている。その佇まいといい、身につけている物といい、相当身分の高い者なのだろう。深い翠玉の瞳は、誇らしげに美夏を見つめていた。
「ラーフィール」
美夏は微笑み、彼の差し伸べた手を握る。
「ありがとう。あなたの手助けがなかったら、わたしはここまでたどり着くことすら出来なかったわ」
「さすがは俺たちが認めた勇者だ」
強い意志を感じさせる、凛々しい声。
両刃の大剣を手にしていた男が、美夏に優しく微笑みかけた。剣士のようだが、鎧は身につけていない。短い緋色の髪に、青玉のように透明で透き通った真っ青な瞳をしている。
「ティール」
背伸びをして彼の首に両腕を回し、美夏は感謝を込めて抱擁をする。逞しく鍛えられた腕が、優しく美夏の背を撫でた。
「ありがとう。あなたが他の魔物を足止めしてくれなかったら、わたしは悪しき竜に近付くことすら出来なかった」
「美夏、大丈夫か？　すぐに治してやるからな」
そして、心配を隠そうともしない優しい声。

背を覆うほど長い煌めく銀髪の、まるで女性かと思うほど整った顔立ちをした魔術師が、緋色の剣士から美夏を受け取って手を翳す。注がれるのは、治癒の魔術。紫水晶のような瞳が、とても心配そうだった。

「マクリル」

温かな癒しの光。何度この優しい光に助けられてきただろう。

「ありがとう。あなたの癒しの魔術がなかったら、わたしはもう死んでいたわ」

彼らは皆、この世界では名の知れた男たちだ。

大陸を統べる王でありながら、悪しき竜を倒す為に自ら剣を手にした金の王、ラーフィール。

大陸一の剣士であり、いつも勇者を守る盾となってくれた緋の剣士、ティール。

使えない魔術はないと言われている、無限の魔力を持つ銀の魔術師、マクリル。

どんなに強い力を授けられようとも、彼らの手助けなしでは決して使命を果たすことは出来なかった。美夏はもう一度、感謝の言葉を告げる。

「みんなが居てくれたから、わたしは使命を果たせたんだよ。本当にありがとう」

光を受けて煌めく少女を、その頬に伝う涙を。

ぼろぼろになった剣を、風に舞う不揃いの黒髪を、男たちは愛おしそうに見つめた。

まるで神々しい女神を目の前にしているかのように、瞳を細めながら。

序章（4）

「取り敢えず一度、城に戻ろう。皆、勇者の帰還を心待ちにしているだろう」
ラーフィールがそう告げる。
世界はようやく畏怖すべき敵が永遠に葬られたことを理解したかのように、音を取り戻していた。吹き抜ける風は、今が春であることを思い出したかのように暖かい。
「うん。またみんなに会えるなんて、嬉しいな」
悪しき竜との決戦前に立ち寄り、人々から温かく迎えられたことを思い出し、美夏は微笑む。
大陸を統べる王である彼の居城は、この大陸のほぼ中央に位置している。初めて見たときは、その城のあまりの広大さに驚いた。白く輝く美しい王宮。けれどあの時、人々は滅亡に怯え多くの剣士や魔術師が警備に当たっていた。きっと今ならば、明るい笑顔を見ることが出来るだろう。
「でもわたし、まず先生のところに報告にいかなきゃ」
遠隔通話では伝えた。けれど、やはり直接会いたい。
「先生？　ああ、魔術を教えてくれたという」
「そう。でも魔術だけじゃないよ。剣も教えてくれたし、この世界のことを何でも教えてくれたの」
保護者みたいなひとだよ、と言って笑ったのは照れ隠しだった。いくら生死を分かち合った仲間たちでも、男性に恋愛関係の話をするのは恥ずかしかった。もし女性の仲間がいれば、相談に乗って貰えただろうか。
「……保護者」
けれど金の王ラーフィールは、何故か美夏の言葉に考え込んでいる。
「ラーフィール？」

「保護者ならば、一度挨拶をせねばならないな。お前がこの国では誰も身内がいないから、軽く見ていた訳ではないのだ。ただ、誰にそう言えばいいのかわからなかっただけで。そういう人がいるのならば、話は別だ。すぐに城へ呼び寄せよう。何処の町にいるのだ？」
「？」
その言葉の意図がわからず、美夏は小首を傾げる。その愛らしい仕種に笑みを浮かべながら、ラーフィールは私も会ってみたいので城に呼んで貰えないか、と言い直す。
「うん。来てくれるように頼んでみるね」
美夏は早速、師に話しかけてみた。
「先生、先生」
遠い場所にいる相手と会話することが出来る遠隔通話は、少しでも魔力を持っている者ならば誰もが使える魔術だった。ただ会話するには、まるで相手が目の前にいるかのように声を出して話す必要がある為、ひとりごとを言っているように見えてしまう。美夏も当初は随分ひとりごとを言う人が多い世界だなぁ、などと思っていた。
「どうした？」
「あのね、ラーフィールがね、先生に会いたいって言ってるの。だから、お城まで来てくれるかなぁ？」
「ラーフィール？　金の王か。わかった。城へ行けばいいのか？」
「うん。わたしもすぐに行くからね」
ラーフィールが会いたいと言ってくれたお陰で、すぐに彼と会えることになりそうだ。大切な人と再会出来る嬉しさから、幸せそうに微笑んだ美夏は、ふと背後が騒がしいことに気がついて振り返った。

序章（5）

「？」

ほんの少し前まで、困難な目的を共に達成した仲間として穏やかに微笑みを交わしていた金の王ラーフィールと、緋の剣士ティールが、何故か剣呑な雰囲気を漂わせている。その間で銀の魔術師マクリルが、少し呆れたように苦笑していた。

「え、え？　何があったの？」

「いいよ、美夏は気にしなくても。まったく、この男たちは。美夏の意志を確かめもしないで突っ走って。さ、先に城に行こう」

「う、うん……。でも二人はテレポート出来ないよ？」

ラーフィールも魔術を使うことは出来るが、攻撃系のものだけ。ティールは素晴らしい剣士だが、魔術を使うことは出来ない。心配そうに告げる美夏に、後で連れてくるから大丈夫だよ、とマクリルは笑う。

「先に美夏を送っていくよ。先生が来てるんだろう？　はやく案内してあげないとね」

「あ、うん。行く」

先生、と聞いた途端に笑顔になって、美夏は差し伸べてくれた手を握った。繋がれた手に、マクリルは一瞬瞳を細める。

「行こうか」

けれど美夏が顔を上げるといつもの明るい顔に戻って、彼は城へとテレポートした。

「ん？」

「美夏？」

ラーフィールとティールが気が付いた時には、もう二人の姿は消えていた。

「先生っ」

辿り着いた先は城の中ではなく、その周りを囲んでいる見事な庭園の中だった。
春の穏やかな風に乗って、色とりどりに咲き乱れる花の香が漂っている。噴水から溢れ出る水の音。水面は陽の光を受けて煌めいていた。
その噴水の縁に腰をかけて、見事な庭園を瞳を細めて見つめている男がいた。美夏が嬉しそうに彼に駆け寄っていく。
（あれが、美夏の先生？）
どんな男なのだろう。
興味を覚えて、マクリルは美夏を追って視線を走らせる。
まず眼に入ったのは、白く長い髪だった。この色彩豊かな春の庭園に、それはあまりにも不釣り合いのように思えた。まるで冬の雪のように白い。そして髪だけではない。その肌も透き通るように白い。瞳が紅ければアルビノかと思ったに違いない。
駆け寄って来た美夏を見つめた瞳は、海のような深さを感じさせる濃い青色だ。年は自分やラーフィールたちとそう違わないだろう。彼は美夏と何事か会話を交わし、そのまま立ち尽くしていたマクリルに視線を向ける。
美夏が先生と呼ぶその男と視線を交わした時。背筋がぞくりとするのを感じた。
思わず全身に力が入り、肌がざわめく。あまりにも馴染みのない感情だったから、それが畏怖だと気が付くのが少し遅れた。無限の魔力を持つと言われたこの自分が、目の前の男を恐れている。
（この男、相当強いな……）

序章（6）

かなり強い魔力を感じた。
おそらくこの大陸に数多くいる魔術師の中でも、頂点に立てる程の力を有しているだろう。それなのに彼は、魔術師のローブを纏ってはいない。普通の旅人のような服装をして、腰にはやや長めの剣を差していた。
魔術の威力や成功率には、精霊の力が深く関係している。自分の魔力だけでは使えない魔術でも、精霊の力を借りることによって成功するのだ。人間の魔力には限りがある。マクリルが無限の魔力を持つと言われているのは、それだけ精霊に愛されているからだった。
けれど精霊は、極端に刃物や血の匂いを嫌う。剣を手にしている者には、力を貸してくれることは決してない。つまりこの魔力はすべて彼自身のものだと言える。
（そういえば美夏は、魔術も剣も教わったと言ってたな）
まだ年端もいかぬ少女とはいえ、美夏もまたその華奢な身体に恐るべき力を持っていた。それを仕込んだのが、彼なのか。
「あ、彼がね、わたしの……」
気が付けば手を上げて、美夏のその言葉を遮っていた。
「マクリル？」
「先にあの二人を連れてくるよ。会いたがっていたし、俺だけ先に会ったら恨まれそうだ」
その言葉に、美夏は無邪気な顔で笑う。
「そうね。その方がいいよね。迎えに行ってあげて」
二人の仲間が自分と同じく、まだ幼さを残すこの少女を愛しているのは知っていた。
自分にとっても、そして破滅に向かっていた世界にとっても美夏は眩いばかりの希望だったのだ。惹かれるのは無理もないだろう。
どんなに困難で絶望的な状況でも決して諦めない強さ。どんな身

分の人間だろうと分け隔てなく接し、困っている人は放って置けない優しさ。それに触れるにつれ、愛しさは日ごとに募っていった。けれど美夏が他の二人と出会ったのは、その腕がかなり洗練されてからだ。

あの二人よりもずっと先に彼女と出会っている。最初の頃は力こそあっても戦うことに慣れない美夏は、怪我も多かった。それを傍にいてずっと癒してきたのだ。

二人の知らない美夏を知っている。

それが恋敵への余裕ともなっていたのだ。それなのに。

自分よりもずっと先に、彼女を知っていた男がいる。それもただの男ではない。

（俺たち以下の男だったら、いくら師匠でも遠慮はしなかったんだけどね……）

あれだけ強い男は他にはいないだろう。

「うーん、これは俺ひとりで対抗するのは、ちょっと大変かもな。仕方ない、不本意だけどあの二人にも参戦させるか」

溜息と共に呟き、マクリルは二人の待つ決戦場跡へと移動する。

序章（7）

そして置き去りにしたラーフィールとティールを連れて、再びこの庭園に戻ってきた。

彼に美夏の師匠のことを教えられた二人は、無言だった。周囲を見渡す男たちの瞳に、愛しい少女の姿が映る。

美夏はひとりきりだった。

マクリルが初めて見たときの彼女の師のように、噴水の縁に腰をかけている。水面に浮かぶ花びらがゆらゆらと揺れるのを、日射しに瞳を細めながら見つめていた。春風が揺らす漆黒の髪は、いつのまにか肩の辺りで綺麗に切り揃えられている。ボロボロだった鎧も元に戻っているが、純白だったその鎧は何故か紅に染まっていた。

先程までこの咲き誇る花にも劣らない笑顔を見せていた筈だ。それなのに今は何故かとても悲しそうに見える。陽で暖められて温度を増した水に指を浸し、白い指に絡まる花びらを見て溜息をついた。その寂しげな様子に、男たちは顔を見合わせる。彼女の師匠という白い男の姿はなかった。

「……美夏？」

最初に声を掛けたのは、この城の主でもあるラーフィールだった。腰を下ろしている美夏の視線に合わせて膝を曲げ、心配そうに覗き込む。

（彼を跪かせるのは、世界中を探しても美夏だけだろうな……）

その光景を見つめながら、ティールはそんなことを考えていた。

ラーフィールやマクリルならば、この花が溢れる美しい庭園の中でも違和感はないだろうが、彼は少し居心地の悪さを感じていた。元より無骨な剣士。美夏を美しいと思っても、愛しいと思っても今までなかなか言葉にすることは出来なかった。

それに、美夏はただの美しいだけの少女ではない。

あの華奢な身体で、自分に勝るとも劣らない剣技を持っているのだ。それどころかもし体格や力などの条件が同じであれば、美夏の方が上かもしれない。
もちろんティールも彼女を愛し、大切に思っていた。けれど彼女は強い。だからラーフィールやマクリルのように守りたいと思ったことはなかった。
ただいつまでも共にありたいと、そう願っているだけだ。

「ラーフィール」
美夏は顔を上げて立ち上がった。にこりと微笑むその笑顔に、もう憂いの影は欠片もない。
「大丈夫よ。少し、感傷的になってしまっただけ。ここの美しい花を見て、ようやく平和になったんだなぁって実感が沸いたの」
蹂躙されることなく咲き乱れる花。美夏はもう一度庭園に視線を廻らせ、そして金の王を見上げる。
「先生はちょっと急ぎの用事があるって出掛けてしまったの。ごめんなさい、ラーフィールに挨拶もしないで。後で戻ると思うんだけど」
「いや、それはいい。それよりも本当に何でもないのか？」
美夏の師匠。あいつは強い。迎えに来たマクリルにそう言われ、この瞳で確かめてみたいとそう思っていたラーフィールだったが、これ以上美夏の表情を曇らせる訳にはいかなかった。

第一章（1）

そしてラーフィールに促され、美夏たちは城の中へと入った。
外壁は白く、まるで建てられたばかりのように輝いているが、聞いてみると意外にも歴史のある城のようだ。手入れが隅々まで行き届いているのでそれをあまり感じさせないのだろう。窓が多く、幾重にも折り重なった光が城の中を明るく照らしていた。
必ず無事に戻れるという保障は、何処にもない旅立ちだった。それが、ひとりも欠けることなく戻れた。そして無事に戻ったということは、もう悪しき竜は滅びたということだ。美夏は廊下の隅や階段などで感激した様子で待ち侘びている侍女たちひとりひとりに声を掛け、手を握る。
「ああ、やっぱり。お姉様っ」
その時、可愛らしい声が廊下に響き渡った。たたたっと軽い足音が近付いてくる。
「よかった。ずっと、お姉様のご無事をお祈りしていました」
美夏の前に走り寄ってきたのは、金色の髪を靡かせた少女だった。まるで西洋人形のように綺麗な顔立ちをしている。薄紅色のドレスの裾を持ち上げ、美夏を見上げる青い瞳は僅かに潤んでいた。
「アーマリー」
にっこりと笑って少女を抱き止めた美夏は、その金色の巻き毛を優しく撫でた。
少女は、王妹アーマリー。ラーフィールの妹だった。
決戦前に立ち寄った時には、夜ごとに響き渡る竜の咆哮に怯え、何日も眠れないと真っ青な顔をしていた。愛らしい少女の痛ましい姿に、美夏は予定を延長して城に滞在した。そしてまるで母親のように毎晩アーマリーを、彼女が眠るまで抱き締めた。それ以来元気を取り戻したアーマリーは美夏をお姉様と呼び、すっかり懐いていた。

「あ、お兄様もご無事で何よりでした」
美夏と何度も抱擁を交わした後、振り返ってついでのようにそう告げた妹に、ラーフィールは僅かに苦笑する。アーマリーは、美夏に出会うまでは王妃を決めることが出来ないくらい兄に懐いていたのだ。だがそれも仕方ないだろう。兄の方も、もう彼女に夢中なのだから。むしろ仲が良いのは喜ばしいことなのかもしれない。
戦いは終わった。
けれどある意味、王としてのラーフィールの戦いはここから始まると言っても過言ではない。
今までの被害状況を纏め、それを可能な限り早く、以前の状態に戻さなくてはならない。過酷な時は耐えられた状況でも、平和になれば不満も出てくるだろう。それで良い、と思う。不満を口にすることが許されない国を作るつもりはない。ただ、これからの忙しさを思うと溜息が出る。
ちらり、と妹を抱き締める美夏に視線を走らせる。その指には青い光を宿す宝玉の指輪。
ラーフィールが、彼女に渡したものだ。
魔術が込められているその指輪は、身につけていると結界を作り出す。悪しき竜との戦いで少しでも美夏を守れるように、と渡した。けれどそれは美夏もまだ知らないが、彼の母、つまり先代王妃の形見の品だった。
次の、王妃に。そう言われてきたその指輪の意味を、いつ彼女に告げたらいいだろうか。

第一章（2）

本当ならばすぐにでも告げる筈だった。その前に彼女の保護者だという男に会い、了解を得ようと思っていた。けれどマクリルから告げられた言葉が、それを躊躇わせた。

あの銀の魔術師が畏怖するほどの男。それほどの男とずっと一緒にいたのならば、美夏だって憧れめいた気持ちを持ってしまうかもしれない。どんなに強くとも、まだ十代の少女なのだから。

だから今はまだ告げるべきではない。まずはこの国の王としての責務が優先すべきだろう。だが、それまで彼女が誰のものにもならないという保証はない。焦燥はあった。けれど、自分の責務も果たさないような男を、彼女が愛するとは思えない。

「アーマリー。美夏を部屋に案内して、少し休ませてやってくれ」

「うん。お姉様、こっち」

無邪気な笑顔で手を引く少女に素直に付き従って、美夏は王宮の奥へ消えた。

「……」

すると周囲に集っていた侍女たちも皆、仕事に戻るべくそれぞれの持ち場へ戻っていく。

残されたのは、三人の男たち。

「俺たちの部屋は？」

集まった侍女たちが全員、美夏が目当てだったと気付き、苦笑しながらマクリルはラーフィールを見る。

「好きな部屋を適当に選べ」

「適当って。美夏には一番奥のいい部屋を用意しておいたくせに。王様が差別をしていいのか……」

「今更、お前たちの前で王の顔をしてられるか。これから忙しくなると言うのに」

豪奢な金の髪を無造作に掻き上げ、ラーフィールは溜息をつく。

一年ほどを共に過ごし、命を賭けて戦ってきた仲間だ。お互いそれなりに信頼しているし気安くなっていた。ただし美夏に関係しなければ、だが。

「出来ることがあれば俺たちも手伝う。では、空いてる部屋を使わせて貰うぞ」

ティールの言葉に、ラーフィールは頷く。

「ああ、助かる。夜には着飾った美夏が見られるかもしれないが、来なくていいぞ」

「……必ず行く」

わざわざ侍女を呼び止め、美夏が来たら告げるようにと言い残してティールは何処かの部屋に消えた。

「あいつも美夏に関しては驚くくらい正直だよな。ま、俺も休むか。さすがに魔力の回復が遅い。お前も少しは休めよ」

「わかった」

マクリルが消える。何処かへ移動したのだろう。アーマリーは上手く美夏にドレスを着せてくれるだろうか。きっと咲き誇るどの花よりも美しいだろう。

第一章（3）

美夏は、嬉しそうに自分の手を引くアーマリーに連れられて、王宮の奥へと歩いて行く。

「お姉様、まずはここで少し休んでください」

どのくらい歩いただろう。階段をいくつか登った後、突き当たりの部屋でアーマリーは立ち止まった。

「夕方頃に着付けの侍女が来ますから、それまではゆっくりとしていて下さいね。何か召し上がりますか？」

「ありがとう。ちょっと喉が渇いたかな？」

侍女が二人がかりで扉を開ける。重厚な扉が開かれた。するとそこには豪華な部屋が広がっていた。

「わぁ……。広いね」

少し驚いて美夏が瞳を細める。以前訪れた時と同じ部屋だと思っていたが、部屋というよりも、高級マンションの一室のようだ。バルコニーのある見晴らしの良いリビング。天蓋のある大きなベッドがある寝室。そして、机や本棚などがある書斎。更に大きな鏡のある衣装部屋や、浴室まである。

「お姉様、この部屋を好きに使って下さいね。鎧はすぐに磨かせます。お着替えとお茶を、今持ってこさせますから」

「あ、ありがとう」

侍女の勧めに従って、美夏はまず浴室で身体を洗うことにした。ひとりで使うのが勿体ないほど広い浴室。香料の入ったお湯に、薔薇の花びらが数種類浮かんでいた。

「すごい。さすがは王宮……」

マクリルが癒してくれたので、傷はひとつもない。白い手足を伸ばして、美夏はゆっくりと浴槽に浸かる。最初にこの城を訪問したとき、浴室にはひとりで入りたいと言ったので、侍女は付いてこな

かった。脱衣所のような部屋で侍女が着替えを置き、美夏の脱いだ鎧を手入れの為に持って行く気配がする。
（……これで本当に、終わったのかな）
浴槽の縁に身体を預け、美夏は瞳を閉じる。
悪しき竜。あの、巨大な黒竜。
凶暴で残忍な竜だった。
王宮に近い場所は騎士団や警備団がいた為、それほど大きな被害はなかったが、地方は酷かった。町ごとなくなってしまった場所もある。もちろんラーフィールが地方を疎かにしていた訳ではない。それだけ竜の被害が大きく、多方面に渡っていたからだ。
最後の決戦に至るまで、何度も戦った。残忍で、狡猾な竜だった。それなのに。
すべてが終わった、あの時。
悪しき竜と呼ばれていた黒竜は、自らの身体が血を流し、動かなくなっていくのを待ち望んでいたかのように、穏やかな瞳をしていた。その瞳の光が、今も脳裏から離れない。
さらに心が晴れない理由はもうひとつ。
師であるルドゥークに、あの庭園で告げられた言葉だった。

第一章（4）

「本当に、よくやったな。さすが俺の弟子だ」
まるで猫の子にするかのように、ぐりぐりと頭を撫でられた。
女性として意識されていないのは明白だったが、それでも美夏は嬉しさに瞳を細める。確かに悪しき竜の暴挙は許せなかった。けれど彼にこうして褒めて貰いたかった、というのも理由のひとつだったから。
「怪我はしてないか？　大丈夫か？」
「うん。マクリルが治してくれたから」
そうか、とルドゥークは美夏の不揃いになった黒髪をさらりと撫でた。すると乱れていた黒髪は元の艶やかさを取り戻し、肩くらいの長さまで綺麗に揃えられていた。
「あ、ありがとうございます」
髪を撫でた手は、ふと美夏の肩辺りで止まる。真っ白だった鎧は、竜の血によって紅く染まっていた。
「竜の血は魔力を持っている。この鎧は優れた魔術防御力を持つだろう。いつかきっと、お前を助けてくれる」
ルドゥークが手を離すとその紅は鎧全体に広がり、深紅の鎧となった。
「まぁ、これをもう身に着けることがないのが、一番なんだけどな」
「うん……」
もう戦いは終わった筈だ。これからこの国は平和になる。きっとみんな、幸せになれる。
だが美夏から手を離したルドゥークの表情は、晴れやかではなかった。
（先生？）
触れようとした手からまるで逃れるように、ルドゥークは背を向ける。

「お前が使命を果たしてくれた以上、俺も約束を果たさないとな。すまないが、時間がない。城を訪れながらも王と対面しない非礼を、詫びておいてくれ」
聞き返す暇もなく、彼の姿は消えた。
「約束・・・・・・って何だろう」
それは、誰との約束なのか。
使命を果たしたのが美夏である以上、自分との約束なのかと思うが、まったく覚えがない。時間がないという言葉の意味。そしてまるでそれ以上の追求を避けるかのように、去っていった後ろ姿。
「あんな風に逃げなくっても、いいじゃない……」
心に落とす影を振り払うかのように、美夏はぱしゃりとお湯の中に身を沈めた。

侍女が用意してくれた着替えは、裾の長いシンプルな青いドレスだった。以前はまるでお姫様のようなドレスを用意されてしまったことを思い出し、あれはあれで楽しかったかな、と思いつつひとりで着替えをする。
「お姉様、お茶の用意が出来ました」
浴室から出ると、アーマリーがにこにこ笑いながら出迎えてくれた。広いリビングには花の彫刻が施された大きめの机が運ばれ、白い陶器のポットから湯気が立ち上っている。香りからすると、蜂蜜を入れた花茶のようだ。お茶だけではなく、焼き菓子や果物なども並べられていた。
「わぁ、すごいね。ありがとう」
促されて椅子に座ると、侍女がカップにお茶を注いでくれた。一口飲むと、蜂蜜の甘い香りが身体を癒してくれる。
「ねぇ、お姉様？」
向かい側に座ったアーマリーが、同じくカップに注いだ花茶を手にしながら、上目遣いで美夏を見た。
「なぁに？」

「お兄様のこと、どう思っている？」

第一章（5）

「えっ？」
突然の言葉に返す言葉が見つからず、美夏はアーマリーの人形のように整った顔を見つめた。彼女の意図は何なのだろう。
「ど、どうって？」
「好き？　それとも、あんまり好きじゃない？」
美夏の躊躇など気に止めない様子で、無邪気にそう尋ねる。どう答えたらいいか迷った後に、美夏は口を開いた。
「もちろんラーフィールは立派な王様だと思っているし、尊敬もしてるよ」
「王様としてじゃなくて……」
けれどそれはアーマリーの望んでいた言葉ではなかったらしく、彼女は視線を落として小さく首を振る。
「どうして？」
どう答えるべきが、更に悩んだ美夏は、アーマリーの意図を確かめようと質問を返した。すると彼女は花茶が入ったカップをテーブルに置く。
「他の女の人たちは、お兄様を王様としか見ていなくて嫌だったんだけど。でもお姉様なら、お兄様をあげてもいいかなって思ったの」
ラーフィールとアーマリーの両親は、すでに亡くなっていると聞いていた。周囲に人は大勢いるとはいえ、たったふたりきりの兄妹だ。きっと彼女にとっての兄は、とても大切で大きな存在なのだろう。
「ありがとう。わたしはまだそういうこと、考えていないけど。でも嬉しいよ」
曖昧な返答かとも思ったが、むやみに彼女の好意を否定してはいけない。そう思った美夏は、それだけを告げて嬉しそうに微笑む。
やっぱり美少女は笑った顔が一番いいな、と美夏はまたひとつ、平

和になった喜びを噛み締めた。
「じゃあお姉様、今日の平和になったお祝いの宴では、お兄様と踊ってね」
「え？」
宴？　と聞き返す。そういえば先程、夕方になったら着付けの侍女が来ると聞いたような気がする。師の言葉に気を取られ、聞き流してしまっていたことに。美夏は今更気が付いた。
「まだ国のすべてが平穏になった訳じゃないからささやかなものだと思うけど、ドラゴンスレイヤーの勇者を讃えない訳にはいかないって」
美夏が何か言うよりも早く、アーマリーは立ち上がった。
「わたしも今夜のドレス、選ばないと。お姉様、約束よ。絶対にお兄様と踊ってね」
「え、ええ」
思わず答えてしまい、アーマリーが姿を消した後に溜息を付いた。
「ダンス……。わたし、全然踊れないんだけどなぁ」

第一章（6）

ふと風に当たりたくなって、美夏はリビングからバルコニーに出た。
吹き抜ける風は、穏やかでとても心地良い。しばし瞳を閉じてその風を楽しむ。
終わったという達成感。それが少しずつ実感となって身体に染み込んでいく。
思えば向こうの世界での今までの人生は、努力とか一生懸命という言葉とは、あまり縁のない生活だった。不満があった訳でもなく、それなりに幸せだった普通の人生だ。ただ何かを達成しようと、努力をすることはほとんどなかったように思う。それがこの世界に来て、文字通り命懸けのことを成し遂げた。少しは人間として成長出来ただろうか。
「マクリル？」
ふと誰もいない筈のバルコニーに気配を感じて、瞳を閉じたまま美夏はその名を呼んだ。
「ああ、俺だ」
気配が、明確な人の姿になっていく。陽光に銀の髪を煌めかせて、魔術師マクリルは真っ直ぐに美夏を見つめた。
「それ似合うな。可愛いぞ」
飾り気のない青いドレスを着ているのを見て、マクリルは少しだけ嬉しそうにそう告げる。
「ありがとう。こういうのだったら、まだいいんだけどね。夕方にはもっと着せ替え人形みたいになるかも」
「着せ替え人形？」
「うん、そう。なんかね、着付けの侍女さんが来て着せてくれるんだって」
何のことかと瞳を細めたマクリルは、それが夜に行われる祝いの宴のことだと気付いたらしい。ああ、と小さく呟いて苦笑する。

「それはさぞかし豪華に着飾られるんだろうな。まぁ、美夏は竜を討伐した勇者なんだし、しばらくはそういうのが続くだろうな」
ええー、と美夏は不満げに唇を尖らせる。
師であるルドゥークの次に付き合いの長いマクリルには、まだ弱くて情けなかった頃を知られている。だからこそ、どんな顔を見せても大丈夫だという安心感を覚えていた。
「わたしひとりで倒したんじゃないのに……」
「まぁ、そう言うな。お前がいなかったら無理だったんだから。俺たちだけじゃ倒すことは出来なかった」
竜の鱗はとても固く、普通の剣では傷を付けることも出来ない。魔術もその固い鱗に阻まれて、致命傷を与えることが出来ない。特別な魔術を宿した剣、選ばれた者しか扱えないという美夏の剣だけが、その鱗を切り裂くことが出来たのだ。
「たまたま剣に選ばれただけなのに」
「その剣に選ばれし者を、普通は勇者って言うんだよ。美夏はあんまり豪奢に飾り立てるより、今みたいなのが似合うと思うけどな」
不意に、マクリルの指が美夏の黒髪に触れる。風に揺られて、先程浴槽を満たしていた香料が美夏の身体からふわりと薫った。
「黒髪に、青い服。どっちも俺の好きな色だ」

第一章（7）

真摯な瞳で真正面から見つめられ、思わず頬が赤らむのを感じて美夏は瞳を反らす。
「あはは。ありがとう。そういえばあんまり黒髪ってみないもんね」
「短くなってしまったな。勿体ない」
「またすぐに伸びるよ」
太陽は少しずつ傾きつつあった。赤みを帯びた光が、地上を照らしている。
けれどもう、夜を恐れる必要はない筈だ。
地上が暗闇で覆われたとしても、朝は必ず来るのだから。
マクリルはふと表情を変えた。
「少し、気になることがある。俺は先にこの城を出ようと思う」
「え？」
師に続いて、マクリルまで傍を離れると言い出した。不意に、親しい人がどんどんと傍からいなくなってしまうような、そんな寂しい予感に襲われる。
「どこへ……」
「まぁ、たいした用事じゃないんだけど、確かめたいことがあってね」
「どうしても、行くの？」
思わず彼の傍に寄り、その水晶のように透明な光を宿す紫色の瞳を見つめる。
「……美夏にそう言われると、俺だって行きたくはないんだけどね。予定ではもっと一緒にいる筈だったし。帰ってきたら、もう誰かのものになってたら嫌だな……」
苦笑したマクリルは、不意に背後から美夏を抱き締める。
「え……」
女性のように見える綺麗な顔立ちをしていても、やはりその腕は

男性のものだった。
「マ、マクリル？」
密着していると彼の魔力を感じる。まだ弱かった頃は、何度もこの魔力に救われた。だからなのだろうか。とても安心する。きっと何があっても助けてくれると、そう信じられる。
「俺が美夏が好きだって、知ってた？」
耳元で囁くように言われ、紅く染まった空と同じ色の顔で、小さく頷いた。
知っていた。
自分に向けられる穏やかな視線は、触れた優しい腕は、いつもその想いを伝えてきたから。
気付かないふりをしていたのではない。
でも自分はまだ本当に子どもで、師に対する憧れのような気持ちは持っていても、自分に向けられている好意をどうすれば良いのか、わからなかったから。
「そうか」
いつもの優しい声でマクリルは頷き、そしてそっと腕に閉じ込めていた美夏を解放した。
「別に返事が欲しいとか、そういうのじゃない。ただ知っておいて欲しかっただけだ。じゃあ、行くよ。夜は忙しくなるだろうから、今のうちにゆっくり休んだほうがいい」
すっと遠ざかる気配。
「あ……」
思わず手を伸ばす。けれどもう、そこに彼はいなかった。
「マクリル……」
この胸に沸き上がってくる不安は、単に親しい人が傍にいないという、それだけの理由なのだろうか。

第一章（8）

美夏と別れたマクリルは、戦いの気配がまだ色濃く残る、最終決戦の場所へと向かっていた。

まだここを離れてから数時間も経っていない。それなのにもう、懐かしさすら感じる。時の流れは何故、こんなにも急いでいるのだろう。

この場には、死闘の末に倒した竜の亡骸がそのままになっている。竜の鱗には魔力が宿っている。それを悪用する者がいないようにと、決戦後に結界を張っていたのだ。

容易く破れるような結界ではなかった。精霊の力を借り、渾身の力で作ったものだ。それなのに何者かが侵入した気配を感じ、美夏の元を離れたのだ。

先を急いでいたマクリルは、風の精霊のざわめきにふと足を止める。用心深くその地を探った。何か強い気配を感じる。

（あれは……）

死する竜の前に立つ白い人影。それは美夏が師と慕う男ルドゥークだ。確かにあれほどの力を有する彼ならば、結界を破るのは容易かっただろう。

だが、何の為に。

マクリルはあえて気配を消さずにその方向へ向かう。それを感じない筈はない。だがルドゥークは振り向きもせずに、静かな声で死竜に語りかけていた。

「約束を、果たしに来た」

まるでその死を悼むかのように、ルドゥークはその亡骸に触れる。何をするつもりなのだろう。制止するべきか躊躇うマクリルの目の前で、漆黒の竜の亡骸は光に包まれた。まるで罪が浄化されるかのように、その骸は白く染まっていく。

「何を……」

その白は、悪しき竜と呼ばれ無残な姿を晒していたあの竜と同じとは思えないほど、あまりにも無垢で。
「約束だったからな。すべてが終わったら、元の姿に戻してやると」
「……いったい何を企んでいる」
美夏の師として竜と戦う術を授けながら、この竜との約束をしたと言う。
美夏と一緒に彼と初めて出逢ったときよりも遙かに強い力を、今の彼からは感じた。そう、この悪しき竜すら彼ひとりで葬り去れるだろう。
それなのに何故、彼女を戦わせたのか。
「企んでなどいない。……願っているだけだ」
白く輝く鱗を、もう命を宿さぬ骸を愛しげに撫でながら、彼は呟く。
「人に在らざる身で、何を願う」
これほどの力を有する者が、人である筈がなかった。その正体が何であれ、悪しき竜よりも更に危険な存在なのではないか。警戒を強めるマクリル。
「俺の願いは、お前達と同じだ」
「同じとは？」
用心深く、言葉を口にする。
世界の平和。まさか彼はそう言うつもりなのだろうか。信じられる筈がない。だが彼は穏やかな笑みを浮かべてこう言った。
「美夏の幸せ。ただ、それだけだ」

第一章（9）

アーマリーが告げた通りに、夕方になると侍女が三人、大きな荷物を抱えて部屋に入ってきた。
「美夏様。お支度を手伝わせて頂きます」
「あ、はい。よろしくお願いします」
髪を結い上げ、薄化粧をして絹のドレスを身に纏う。
（何だかわたしじゃないみたいだ……）
鏡に映る、着飾った姿を見て苦笑する。
「とてもお似合いですよ」
手伝ってくれた侍女はそう言ってくれたが、何となく居心地の悪さを感じて俯いてしまう。
（こんな姿、先生に見られたら嫌だなぁ）
そんなことを考え、ふと思う。
本当ならば、綺麗に着飾った姿を見せたいと思うのではないだろうか、と。
そして思い出したのは向こうの世界での暮らし。好きな人に綺麗だと言って欲しくて。その為だけに一生懸命に何時間もかけて服を選び、メイクをして。
それなのに、これ以上にない程着飾った姿を見られたくないなんて。
「……」
美夏は黙ったまま、鏡の中の自分を見つめる。ならば誰に見せたいと思うのだろう。鏡の中の自分を突き放すかのように、瞳を閉じた。
（わたしは……）
その時、別の侍女が美夏を迎えに来た。彼女も会場に出るのだろう。少し控えめなドレスを身につけている。
「美夏様。そろそろお時間ですが」

「はい。今行きます」
ふるりと首を振り、脳裏に浮かんだ面影を振り払う。そして侍女に手を取られ、ゆっくりと会場へ向かった。

簡素なものだと聞いていたが、そこに集まっていた人数は想像以上だった。どの顔も晴れやかで楽しげだ。自然に美夏の顔にも笑みが浮かぶ。そのまま真っ直ぐに、両側に整列している人達の前を通って一番奥にいるラーフィールの所まで歩いた。どうやら貴族達だけの出席ではないようだ。精一杯の晴れ着を着たらしい市民の姿も見え、ますます優しい微笑みを浮かべる。
侍女からその白い手を受け取り、金の王ラーフィールは美夏を隣に立たせた。
「皆も既に知っているように、悪しき竜は勇者、美夏の手によって滅びた。もう夜を恐れる必要はない。我が国の救世主、勇者に祝福を」
地面が揺れた気がした。それほどの歓声が、美夏へと向けられる。あまりの祝福に戸惑い、思わず隣に立つラーフィールを見つめた。

「……ラーフィールめ」
その様子を少し離れていたところで見ていたテイールは、この祝福の場に相応しくない、苦々しい表情をしていた。
王の隣に並び立つことが出来るのはその伴侶、つまり王妃だけだ。彼は美夏をその位置に立たせた。その意味。熱狂する市民たちにはわからないだろうが、貴族達にはわかっているだろう。それが国を救った勇者なのだから、反対の声が出る筈もない。

第一章（１０）

それを見越して、彼女を自分の隣に立たせたのか。

「……」

けれど激高したのはほんの一瞬だった。

ラーフィールも確かに美夏を愛しているだろうが、彼女の意志に反することを強引にするような男ではない。それは短くない時間を共有した者として、確信出来る。彼は王に並び立つ者として、美夏の業績を讃えたに過ぎないのだ。

こうして冷静に考えればすぐに出る答えなのに、彼女のことになると思わず我を忘れてしまう。人を愛するということは、こんなにも意識を作り替えてしまうものだろうか。

初めて出逢ったときにはこんなにも彼女を愛することになるとは、想像もしていなかった。けれど例え彼女への想いが剣を鈍らせることになったとしても、それでも美夏に出会えたことは幸運だ、と思う。

視線の先にいる彼女が身に纏っているのは、薄紅色のドレスだった。華美に飾り立てるよりも、デザインで美しさを強調した趣味の良いものだ。控えめな装飾は、かえってその可憐さを際立たせている。綺麗な黒髪は結い上げられていて、それを少し残念に思う。この国では黒髪は稀だ。流れる黒髪の、その艶やかな美しさが好きだった。そして白すぎない肌は血の通った暖かさを感じさせる。彼女を手に入れたいと、生涯その傍に在り続けたいと願う男は、きっと多いだろう。それに自分たち三人の中から選ばれるとも限らないのだ。どんなに強く望んでも、どんなに努力をしても得られないものが世の中にはあるのだと、ティールはもう知っていた。

「！」

少し切なげに美夏を見つめていたその瞳が、瞬時に鋭さを帯びる。剣の柄に手をかけると、視線をラーフィールに向けた。彼もまた美

夏を庇うように、周囲を警戒している。
一瞬前までの祝福された空気を瞬時に掻き消す程の、強い気配がこの場に出現した。
ラーフィール、ティール、そして美夏の視線が同時にとある場所へと向けられる。
そこにいたのは、ひとりの背の高い青年。
長い髪は、まるで炎を纏っているかのように赤い。そして同色の瞳は射貫くような鋭さで、美夏だけを見つめていた。
今までこの会場に居た男ではない。これほどの強い気配は隠そうとしても隠しきれるものではないだろう。何が目的なのだろう。ティールは剣を握ったまま美夏の傍へと移動する。剣呑な雰囲気を悟ったのだろう。今まで楽しげに微笑んでいた人たちの顔も強ばっている。すぐに警備兵も動いた。
だが彼の赤き瞳は、美夏しか映していない。他の者に用はないどころか、その存在すらどうでも良いことのように、彼女だけを見つめている。だがそれはこの大陸を救った勇者に向ける瞳ではなかった。
絹のドレスを纏ったまま剣すら持たない美夏を庇って、ラーフィールとティールは彼女の前に立つ。視界を遮られ、ようやく赤い髪の青年は視線を二人へと移した。意識を向けられるだけで、息が詰まるようだ。今までこの視線を受けていた美夏は、どうして平然としていられたのだろう。

第一章　（１１）

微笑みさえ浮かべ、美夏は彼に話しかけた。
「わたしに何か御用ですか？」
彼の鋭い視線など気にも止めていないかのような、自然な言葉。
美夏を庇うように立っていたラーフィール、そしてティールも、改めてこの少女はただ美しいだけではないのだと思い出す。例え剣を持っていなくても、美夏は体術も使えるし二人とは違って攻撃魔法も使えるのだ。
その余裕さえ感じさせる美夏の態度に、何を思ったのだろう。ふと、その烈火の瞳から鋭さが消える。代わりに浮かんだのは、彼女に対する興味。これ以上彼女に興味を持つ者が増えるのか、とティールはこの緊迫した状況に似合わぬことを考えた。
「……お前が、竜を斃したという勇者か？」
赤髪の青年は確かめるようにゆっくりと、そう尋ねる。若々しい外見に反して深く落ち着いた声だった。見た目通りの年齢ではないのかもしれない。だとしたら彼は魔術師か、もしくは。
「わたしひとりの力ではありませんが、その中のひとりであることは確かです」
「ならば、聞きたいことがある」
もしくは人外の、魔に属する者か。
そう思い警戒していたつもりだった。だが赤い髪の青年にはそんな二人の警戒も無意味だった。突然、至近距離で聞こえたその声に、反応する暇もなかったのだから。
「美夏！」
かろうじて見えたのは、男に手を取られた美夏の姿。それも手を伸ばす前に、掻き消すように消えてしまう。
「く……」
慌てて周囲を見渡すも、視界の中にいる筈もない。

「大丈夫だ」
だが、焦る二人に聞こえてきたのはマクリルの声。気配だけで、姿は見えない。
「俺が追う」
それだけを告げると気配も消える。その言葉通り、美夏の後を追ったのだろう。
「居たのならもっと早く出てこい……」
宴には出ないと言っていた筈の彼が何故、この場に居たのか。疑問はあるが、彼が居てくれたのは幸いだった。無限の魔力を持つと言われている彼ならば、転移の魔法の軌道を辿ることなど容易いだろう。だが最愛の少女を目の前で奪われたのは痛恨だった。
「あの男。何者だ……？」
ただの人間ならば、遅れを取る筈がない。
平和になったと思っていた。
あとは復興へと突き進むだけだと思っていた。だが。
「どうやら宴は延期のようだな」
ティールの言葉に、ラーフィールも頷いた。

第一章（12）

油断していたつもりはなかった。
だが、彼の使う魔法はあまりにも発動が早かった。腕を掴まれた、と思った瞬間にはもう飛んでいた。
辿り着いた先は、見知らぬ山の頂上らしき場所だった。山とは言っても緑豊かなものではなく、岩石がごろごろと転がっている殺風景な場所である。見渡す限り、緑はまったくない。空気も心なしか熱く、乾いている気がする。
（……どうしよう）
乾燥した空気に唇の乾きを覚えて、無意識に噛み締める。剣は持っていないし、ドレス姿で体術を使うのにも限界がある。普通の人間にならば素手でも負けることはないだろうが、この巨大な気配からして只者ではなさそうだ。だがその時、ふわりと身体を包んだのは馴染みの魔力。それはあまりにも身近すぎて、まるで自分のものような気さえする。誰が相手でも彼と一緒ならば、きっと大丈夫だろう。
美夏の腕を掴んでいた赤い髪の青年は、視線を美夏ではなく、その背後で彼女を守るように抱き締めている男へと移した。
「俺の跳躍についてこれる人間がいるとはな」
美夏の守護者、そして無限の魔力を持つと讃えられた銀の魔術師マクリルは、その剣呑な視線を真っ正面から受け止めていた。
「美夏に聞いても無駄だよ。彼女はほとんど事情を知らないからね」
「知らぬ筈がないだろう」
見るからに巨大な力を持つ者から向けられる殺気に、さすがの美夏もびくっと肩を震わせる。だがマクリルは動じない。宥めるように美夏の肩を優しく撫で、言葉を続ける。
「本当だ。美夏だけじゃない。俺たちも何も知らずに、今まで戦っ

ていたんだ」
「え……」
その言葉に、美夏は思わず彼の整った顔を見上げる。彼は何を言っているのだろう。あの戦いはこの大陸を平和にする為の、悪しき竜から守る為の戦いだった。それ以外の意味はない。師であるルドゥークが、そう言ったのだから。
だが彼女のその態度が、何も知らないと言うマクリルの言葉に真実味を持たせることになった。
「本当に、何も知らないと？」
「ああ。だから彼女は帰してやってくれないか。その代わり、俺が知った情報はすべて提供する」
赤い髪の青年は少し思案した。視線を美夏へ、そしてマクリルへと移す。
「……いいだろう。元の場所へ戻せばいいのか？」
彼が、美夏に向かって手を伸ばす。
「マクリル！」
飛ばされる。
そう思った時にはもう逃れる暇もなく、美夏の周囲からすべてのものが消えていく。岩だらけの山も、赤い髪をした男の鋭い視線も。
そして、マクリルも。
彼は笑っていた。大丈夫、心配するな。唇がそう動いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6446t/

そして戦いは終わり、勇者は花嫁になる

2011年7月24日11時37分発行